
夢を見ていた

おろろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を見ていた

【Nコード】

N9646S

【作者名】

おろろ

【あらすじ】

少年は夢を見ていた。

暗く寂しい闇を……そんな話です。

ホラーとありますが、全然ホラーではないですね

夢の始まり（前書き）

ホラーとありますが、ホラーではないです。

なので、そういう描写は出てきていません。今のところですが

これはフィクションです。登場する人物などは実在しません。

夢の始まり

人は頭の中で思っていることを感情に表すのが得意だと思う。

そもそも、感情とは《好き・嫌い》喜怒哀楽などの心の動きのことを言う。

その感情を表に出さないのは、特殊な訓練をされた人間ぐらいだろう。

それ以外ならば、もともと感情を持ちあわせていない人間か、感情を捨ててしまった人間。このどちらかであろう。

この話、感情を捨てるなんてどう考えたっておかしいに決まっている。僕らは迷うことなく答えるだろう。

しかし、それが出来るのであれば？人はその事実を認めるのだろうか……

口で言っただけでは誰も信じることなんて出来ない。人間はれっきとした確信が欲しい生き物なのだから。

だって世の中は証拠がなければ事件なんて解決できないし、逆に言えば、証拠さえ出なければ完全犯罪など簡単なのだ。

つまり、僕ら人間は証拠を突き出された時点で、それを信じることしか出来なくなるのだ。

♪ ♪
僕は毎晩、夢を見ている。

夢なんて所詮、頭の中にある欠片ピースを断片的に繋げたものだと言のオレはテレビなんかの知識をたどってそう思っていた。

夢といっても最初は軽いもので、小学校4年生に見た夢が最初の夢なのだろう。

その最初の夢はただ、歩くだけ。果てしない暗闇の中を歩くだけ……それだけだった。

普通の人はもっと、楽しそうに遊んでいる風景や、好きな人と一緒にいる光景なんかを見るのかもしれないけど、僕の見ていた夢は違う。

自分も見えない、何も聞こえない、動く気配さえない、そんな暗闇ににいるという夢だった。

その暗闇のせいなのか、小学生だった頃の僕はこの暗闇の中で、ずっと泣いていた。泣いてはこの永遠に続くような世界から、今すぐにも立ち去りたかった。

そしてしばらくすると、泣きつかれ、夢の中で寝てしまう。そのまま気がつけば朝を迎えているのだった。

最初はとても怖かった。けど、この夢がその日から何日も続くので、勇気を振り絞って母さんに夢のことを打ち明けた。最初は聞くだけだった母さんだったのだが

「まだ怖くて、一人で寝れないの？しょうがないんだから……」
そう言って一緒に寝てくれた日もあった。しかし、それでも夢は止まることはなかったのである。

そんな日々が続き、高校生になったある日、僕は暗闇の中を歩いてみようと思いつく。

その判断にもっと早く思いつきさえすれば、運命は変わっていたのかもしれない。

しかし、逆に言えばこの思いつきさえしなければ、後々の人生を後悔をしなくて済んだのかもしれないかった。

歩き始めた僕だったが、暗闇の特有の平衡感覚の麻痺でどの方向に進んでいるかもわからないし、どうやったらこの夢から出られるのかさえ分からなかった。

そう、それほどまでに僕が今まで見てきた闇は暗く深かったのだ。
そして、どんなに歩いても先は見えてこない。その現実は何度あきらめようとしたとか。僕は何度もその場に座り込んだ。

けど、このままではいけないと気持ちを奮い立たせて何度も立ち上がった。

そして、あれからもう何度立ち上がったのか分からなくなってしまったが、それでも先ほどの暗闇とは違いかすかに視界が明るくなったことを認識することができた。

歩き疲れていたせいか、黒の世界は消えて新しい白の世界が支配しだした時、僕の記憶は途切れてしまった。

「ん……………あれ…………？」

何分？何時間経ったのだろうか？気づけば僕は見知らぬ場所に出てきていた。

全身を駆け巡る興奮に支配されつつも、僕は地面を踏みしめた。
そこは砂利や土ではなくコンクリートの地面だった。そして目の前には大きなビルが立ち並び、その向こうには光り輝くネオンが見え隠れしている。

きよろきよろとあたりを見渡すと、後ろにさっき出てきたと思われる開けた空間ひらがあった。

「やった……………やっと出てこれたんだ……………！！」

僕は状況を理解して1人その場で地面に手をつく。手のひらに触れたコンクリートは、夢とは思えないほどしっかりとした感触だった。

しばらくして、疲れ果てていた僕は倒れこむようにその場に大の

字に寝転んだ。

空にはきらびやかなネオンが反射した月が祝福でもしてくれてるかのように僕を照らしてくれていた。

「あっ……………」

いつものように、自然とまぶたが重たくなり夢の世界から現実に引きずり戻されてしまう感覚が襲う。

ザッ　　ザッ

（…………ん？）意識が途絶えそうになった時、近くに人が歩いて来る気配を感じ、鉛のように重たくなったまぶたをそっと開く。

「……………だ……………れ……………」

僕は声にならないようなかすれた声を気配にむかって投げかける。しかし、返事は戻ってこない。

返事の代わりに気配はさっきよりもさらに近づいてくる。

「あなたはきつとこの悪夢から逃げられますわ。……………だから、そのときまであなたの大切な夢はお預かりします」

そついうと、ネオンに照らされた人影はそつとしゃがみこみ、僕の顔をなでる。

「……………？」

僕の顔をなでてきたのは、見知らぬ制服を着た少女であった。

年は同じぐらいだが、会ったことはもちろんない。しかし、なぜかは分からないが心が楽になる。そんな気がしてしまう。まるで、本人は知らないのに本能は知っているかのようだ。

しばらくして、少女はゆっくりと立ち上がりはじめる。立ち上がると同時に、腰まである長い髪が宙を舞った。

「あ……………」

自然と流れ落ちる髪に細くしなやかな指を絡め、まるで遠くを見るような目つきで少女は僕を見下ろした。しかし、その僕を見下ろしている彼女の瞳はどことなく悲しい色をしていた。

それから何分経っただろうか、ずっと見つめ合ったままの僕らであつたが、彼女が先にくるりと向きを変え、空を見上げた。

背後からきらびやかな光を受け、空を見上げる少女を、僕は途切れゆく意識の中でただ見つめることしか出来なかった。

暗闇を通り抜けたあの日以来、僕は夢を見ることはなくなった。

あの日から一年。夢を見なくなった僕は、今では何事もなかったように生活が続けており、高校二年生になることが出来た。

しかし、今でも少女の話した会話を忘れたことは一度もない。

少女に会った日、僕は確かに言われたのだ。

『そのときまであなたの大切な夢はお預かりします』

夢を見なくなったのは、あの少女が僕の夢を預かっているせいなのかかもしれない。

もしもそうだとしたら、これから先また出会う日が来るのだろうか？または、その出来事自体が僕の幻に過ぎなかったのかかもしれない

い。

まあ、今日に至ってはそれを絶対と言える確信はどこにもないが

……

学校も終わり、僕はすっかり季節が様変わりした雪の降る街を歩く。出会う人々は全員がコートなどを着て足早にすれ違っていく。あと一週間もすればクリスマスがやってくるため、街はほのかにクリスマススムードを漂わせていた。

僕はみんなと同じように足早に買い物を済ませて、イルミネーションがきれいな繁華街を通る。

（そういえば、あの日の夢もこんなネオンに包まれていたなあ）
あの出来事がつい先日のようによみがえってくる。

空を見上げる少女。

今思えば、あの光はこんな色をしていた気がする。そう思いながら街を歩きながら見渡して歩く。どこもきれいなイルミネーションを光らせている中、僕はある違いを見つけていた。

「……………まさか……………!!」

僕は人ごみの中を懸命に横切りながら反対側の道路に渡った。

渡りきった僕のすぐ目の前には、この季節では考えられないような薄手の格好をした少女が歩いているのが確認できた。

腰まで伸びた印象深い髪、何よりも服装に特徴があった。

「……………制服……………」

そう、あの日夢の中で出会った少女が目の前にいるのだ。

「……………ねえ!!ちよつと!!」

道行く人々を押しつけて、少女のもとへ走り出した。

そして、それは長い長い物語の始まりでもあった。

夢の始まり（後書き）

ホラーのジャンルにあるんですが、全然怖くないです。

そいった話は今回は全然ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9646s/>

夢を見ていた

2011年10月8日20時31分発行